

---

# 孤独の森～空色奇談～

紡 小唄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独の森～空色奇談～

### 【Zコード】

Z4082D

### 【作者名】

紡 小唄

### 【あらすじ】

それは遠い昔、あるいは何処か遠くて近い場所での話。少年は、森に立ち空を見上げていた。自分が誰なのか此処が何処なのかさえ分からぬ中、声をかけてきたのはガラス玉のような目をした女だった。

人は生まれてくる前は、鳥だったんだって誰かが言つてた。  
誰かが言つてたつて誰かが言つてた、そんな気がする。  
何故自分は此処にいるのだろう、此処？

「何を見ているの」

それは空氣に線を引くよつた、意識をぐいっと引く張るよつた綺麗な音だった。

音が零れてくる口元へとボクはぐるりと田の玉を移動させてみる。

「空」

短く答えてからボクは、田の前の空洞を縁取つていてる薄い唇を見てゆつくりと鼻を見て、まるで金魚鉢に沈んでいるビー玉みたいな一つの目を見たんだ。そこまで見て、やつと田の前にいる存在の全体が目にに入った。

綺麗だなと思った。

怖いなと思った。

寂しいなと思った。

「空をね、見ているんだ」

彼女は答えなかつたから、ボクは聞こえなかつたのかなともつ一度同じ事を詳しく口にした。

「でも、枝が邪魔でよく見えないんだ」

「木々が見なくてもここと離れてこらえられない」

「空を？」

「やつ」

彼女の音はやつぱり綺麗で、だけどなんだか耳の奥が痒くなつて落ち着かない音だなと思つ。

そして、おかしな事を言つ。

「どうして？」

どうして木々が空を隠そうとするのだやつ。  
あの真っ青な空を、何処までも広がる世界を。

「空を見ているとあの空が欲しくなる」

彼女の声はなんだか震えているようだ。

どうしてだらう？

綺麗な空、果てない空、何処までも繋がっている空、その空がどうして怖いの？

「空を見ていると飛びたくなるでしょう？ 空を飛んでこらえられない鳥を見ると妬ましくなる、私たちには羽がないから」

「だた見ているだけで、ボクはいいよ」

「今はね」

憎らしいの？  
恋しいの？

彼女は両手で顔を覆つてしまつた。

ボクはよくわからなくて、黙つて見てた。

「その通り」

顔からあのがラス玉みたいな目をきょろきょろとせながら、彼女は音を奏でる。

「空を見上げるだけで、飛びたくて仕方が無くなる。何故? 何故? 何故? 此処に、"コンナバシヨ"にいなくてはいけないの」

「コンナバシヨ?」

「何でも受け入れるような顔をしておきながら」

そこまで言つと、彼女は両手をだらりと落としてそのまま体全体から力を抜くようにして、その場に座り込んだんだ。  
ボクは、それをやつぱりじつと見てた。

「空を見ていると、拒絶されて飛べない自分がイヤでイヤで仕方なくなる」

「自分を好きにはなれないの?」

そのガラス玉みたいな目は、空を映したらきつともつと綺麗だろう。

「一度拒絶されると、自分の何処が好きかなんてわからなくなるも

「いらない。  
いらない。  
いらない。」

「いらないと真っ向から告げてくる空が怖い」

チリンと風が吹いて壊れた自転車のベルが鳴いた。チリンチリン遠くでまた別の自転車のベルが鳴く。

その鳴き声を聞きつけて、いいやそうじゃないのかもしれないけど一斉にまわりの様々なモノタチが鳴き始める。風を起こし、光を放ち、音を響かせ。

「誰にも会いたくない」

チリン。

「何も聞きたくない」

チリン。

「見たくない、飛べないのならいつそ、動きたくないなどない」

チリンチリンチリンチリンチリン。

「そうしてどうするの?」

誰にも会わず聞かず瞳を閉じて動かず、そうしてどうするんだろうか?

此処で。

コンナバシヨで。

コンナ寂シイ場所デ。

「木になるの」

彼女はチリンと鳴きながらさつと口をついた。

「やつしてどうするの？」

「森になるの」

「そうしてどうするの？」

「森になつて、誰も傷つかないようにそこにその枝で空を隠すの。空を飛ぶ鳥達がこの森に迷い込んで来なつるように、決して見つからないように」

風が吹いた。

そこに放置されていた自転車から枝が伸びてきて、木になつた。

壊れたテレビの画面から枝が伸びてきて、木になつた。

小さなクマのぬいぐるみから枝が伸びてきて、木になつた。

みんなみんな木になつた。

「それでも」

空が見たいと思うのは間違つてゐるだらうか。幾重にも幾重にもそこには悲しみが折り重なつて、生い茂つてざわざわと嘆きを奏でていたけれど。

あの人はもう此処にはいなかつた。

誰も居ない森の中、差込む光と外から聞こえる鳥の囀り。

目の前に一本増えた大木の幹に耳を押し当てた。

そつと耳を澄ますと、水の流れる音が聞こえてくる。大地から水を吸い上げるその音は、彼女の鳴き声にしか聞こえなかつた。

「寂しいね」

人は生まれてくる前は、鳥だったんだって誰かが言つてた。  
誰かが言つてたって誰かが言つてた、そんな気がする。  
誰が言つていたのだろう、傍で歌うように語つてくれたのは誰だ  
つただろう。

（鳥はその羽を休める為に果実を得る為に、木の枝へと身を寄せる）

（人は暮らしていく為に、娯楽を得る為に、利便性を高める為に）

「ボクタチはその為にいるんだね」

嗚呼、そうだ。

その為に、人は生まれる前は鳥だったと教えてくれたあの子の為  
にボクは在った。

音が響いている。

ざわざわざわざわ。

木々が紡ぐその言葉は、数々の悲しみに共鳴して反響していく。

（一度拒絶されると、もう必要ないといわれると……それなら一  
人でいい）

「だから木になるの？」

（何も語らない、何も動かない、何も聞こえない、何も感じない）

きつとその方が楽なんだりうつとボクも思つ。何の痛みも辛さも寂しさも本当に感じることが無いのならば。ここで同じ痛みを持つモノ達と全てを拒否していけるのなひ。

チチチッと小鳥の声がした。

なんて細い光だらう。

木々の合間から、まるで光の糸のよつにそれは幾重にも幾重にも重なりながら、それでも真つ直ぐ伸びてきている。

「暗い森より、鳥のいる森の方がいい」

ボクの言葉に何本かの木々が風も無いのに枝を揺らした。  
なんだか、怯えているみたいだ、これ以上何も聞きたくないとでもいうように彼らは枝をゆすり、葉陰が揺らめく。

「鳥が見たくて、背伸びをしたんだね。上を見てもっと上に行きたくて、空を見上げすぎた……だから木になるんだよね」

そうなんだ。

首が痛くなるくらいボクも空を見上げた。

必要ないと言われても、たとえこの手が届かなくても、それは寂しことだけだ。

空を自由に飛び交う鳥達が枝でその身を休めてくれるのなひ。

それはきつと。

\*\*\*\*\*

「それで？その森はまだあるの」

暖かな布団の中で御婆の手に触れながら、幼子が尋ねる。それに対して、御婆はしわくちゃの口元をそりへ元へしゃりと笑みに任せて歪ませた。

「あるとも」

「その男の子はまだうなつたの」

「さあねえ」

木になつたのか、はたまた鳥になつたのか、分からぬねえと御婆は呟きながらくしゃくしゃと坊やの頭を撫でてやつた。

その森の大木の麓には、小さな人形が眠つている。  
たくさんの孤独が舞く森で、その人形は静かに空を見上げて眠つている。

木々達が空を見上げる姿を彼は見守りながらそこへ在る。

「孤独の森に願わくは」

孤独が費える事は無い。

けれど、それでも尚……諦めないで、何かを誰かを求め続ける。

「空を見上げる」ことを止めずにいられますように

御婆は眠りについた坊やの頭をもう一度優しく撫でてから布団を掛け直し、よこよこせと腰を上げた。

夜だというのに、何処かでチチチと鳥が鳴いた。  
チリンと何処かで誰かが鳴いた。



### (後書き)

元々は、学校の課題脚本として出したものでした。  
あえて、ふわふわとした実態の掴めない感じのお話が書きたくて  
書いたものです。読み手任せにならないように、けれど読み手にあ  
る程度は答えを任せてしまうような作品にしたかったのですが。  
現時点では、これが精一杯ですがもつと精進いたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4082d/>

---

孤独の森～空色奇談～

2010年11月9日14時16分発行